

群集墳における豊穴式から横穴式への移行過程

専修大学大学院・前橋国際大学講師 右 島 和 夫

1. 群集墳研究の課題と本関町古墳群

調査に基づいて本関町古墳群を構成する個々墳を具体的に検討したのをうけて、本項では、本関町古墳群が、赤城山南麓における古墳時代の展開過程の中で、どのように位置づけられるのか、また、日本列島の各地で進められた古墳造営活動・時代展開のなかにどのように位置づけられるのかを検討することにしたい。その場合、古墳群が保有している諸特性のうちから一つのテーマにしぼって検討してみることにする。

表題にも掲げたように、群集墳における主体部は、群馬県地域では、多くの他地域と同様に、ある時点に豊穴式から横穴式へと移行していったわけである。本関町古墳群の場合にも、最初のところで概述したように、おおよそ六世紀中頃を前後した時期を境に、豊穴式から横穴式への移行が果たされたことが確認できる。ここでは、この変化の背景に、どのようなことが横たわっているのかを、古墳の諸特徴から導き出していきたい。また、本関町古墳群における移行過程が、赤城山南麓における、共通した状況なのかを比較検討することにしたい。

初期群集墳について ところで、群馬県地域において、横穴式石室を主体部形式としない群集墳(初期群集墳)が注意にのぼるようになったのは、昭和50年から51年にかけて実施された伊勢崎市(旧赤堀村)峯岸山古墳群、52年から53年にかけての同地蔵山古墳群、また53年の伊勢崎市(旧境町)下淵名古墳群の調査がきっかけと考えられる。その後、前橋市(旧粕川村)の白藤古墳群や渋川市の空沢古墳群など、良好な事例の発見が続き、初期群集墳の様相把握が厚みを増している。

筆者も、下淵名古墳群の調査を担当し、その後、調査報告書の古墳群の項の執筆の機会があり、またその後、次々と発見、調査されるようになった群馬県地域の初期群集墳全般について検討する機会があった。そこで確認できた主な特徴を記すと、①5

世紀後半に形成が開始される。②形成は急激であり、しかも県内の主要地域に一斉に広がる。③低墳丘の小規模円墳を構成の主体とする。④主体部は豊穴式小石槨を主とし、人体が入るギリギリの規模。⑤構成する古墳の中に階層差があり、埴輪の有無が連動している。等々の特徴をあげた。

あらたにこのような群集墳が成立した背景については、一つには、この時代の中心地である畿内の古墳動向を見逃すことができない。ここでは、先駆的に「初期群集墳」の登場が認められるところである。そこでは、生産力の増大等に基づいた有力家長層の輩出を受けて、ヤマト政権によるこれら家長層の直接把握の動きとして、従来の古墳システムの末端に位置づける新たな枠組みとして初期群集墳が登場する。この新しいシステムが間髪をおかず畿内以外の有力諸地域にも広がったと考えられた。その場合、それら諸地域の群集墳に関わる家長層もヤマト政権の直接支配の枠組みに加わったのか否かについては、個別具体例に則した検討が必要であり、まだ完全な解決にはいたっていない。

群馬県地域の場合、この5世紀後半の時期に、明確な時代的画期性を指摘しうる。まず、それ以前の段階の前方後円墳の存在形態を見てみると、その数が非常に限られていること、規模的には非常に大型のものを主体としていたことがわかる。さらに、所在地が平野部の中核地域に限られていたことも特徴であり、寡占的な支配構造が看取されるところである。これに対して、5世紀後半の時期以降、築造される前方後円墳の数が大幅に増大する点と、それらの中に、前代に見られたような圧倒的に卓越した存在を指摘することはできない。しかも、所在地において、従来の伝統的拠点を抜け出して築造される古墳が顕著となる点が注意される。その代表例を高崎市保渡田古墳群に見出すことができる。時代展開の中核エリアが分散する流れ、そこに新たな前方後円墳造営につながる首長層の輩出・成長の過程が見

VII 調査の成果

えてくるわけである。このことと連動するように、集落の大幅拡大、新興地への進出が、集落・生産地（主として水田・畠跡）の様相から明確に把握することができる。畿内の時代動向において概述した有力家長層の輩出の動きが、群馬県地域の場合にも、具体的に、顕著に認められるわけである。この時期、当地域においても畿内同様、初期群集墳が成立する基盤形成が用意されてきたことは明らかだった。

群集墳における横穴式石室の採用 ところで、群集墳における堅穴式から横穴式への移行について、筆者はかつて漠然と、横穴式石室が首長墓に採用される6世紀初頭ないし前半の時期には、これに連動して群集墳にも徐々に採用されるようになると考えていた。そのように考えた大きな要因として、初期群集墳として捉えた古墳群の個々墳には、厳密に時期決定ができる遺物に乏しいことがある。一方で、その当時調査され良好な資料に恵まれているものに5世紀後半の事例が多かったことが判断を一面的にさせてしまったといえる。下淵名古墳群・白藤古墳群・空沢古墳群・芳賀団地遺跡群等であり、周堀内の埋没土中に、6世紀初頭降下の榛名山二ツ岳火山灰層が共通して認められている。もちろん、この種の事例が多いことも確かである。と同時に、初期群集墳の形成が明らかに6世紀前半まで及ぶ事例、あるいは主体が6世紀前半にある事例が増えてきている。世良田諏訪下古墳群、古海松塚古墳群、多田山古墳群等である。地蔵山古墳群も主体は6世紀前半にあることが理解してきた。

横穴式石室採用における首長墓と群集墳 ところで、かつての、群集墳における横穴式石室の採用を、6世紀初頭ないし前半からとする解釈には、その時点でも問題点がなかったわけではない。その第一は、この時期に属する事例の少なさである。それに対して、6世紀後半、さらには7世紀に属する横穴式古墳の多さは圧倒的であり、実際の資料では6世紀前半の空白は埋めきれなかった。調査が古墳群全体に及んでいないためで、未調査の中に6世紀前半までさかのぼる横穴式古墳がひそんでいるのでは、と考えたが、どうしてもこの解釈には無理がある。この群集墳における実態を素直に解釈するなら、群集墳における横穴式石室の採用がピークをむかえるの

は、その実態通り6世紀後半からということになりそうである。そして初期群集墳の形成が6世紀前半まで及ぶ、という実態とスムーズに結びつくことになる。

このような移行過程、言いかえるならば、首長墓と群集墳における横穴式石室採用時期の温度差は、むしろ当時としては現実的な流れであったと考えられる。というのは、前方後円墳をはじめとする有力墳に横穴式石室が採用される流れと、群集墳に横穴式石室が採用される流れは、築造体制を具体的に想定したとき、おそらく同一線上にはなかっただろうと考えられるからである。とするならば、前方後円墳において横穴式石室の築造体制が整ったことは、群集墳においても築造体制が整ったことにはならないからである。群馬県地域における上述した実態からするならば、群集墳における横穴式石室の築造体制が大勢として整備されるようになったのが、6世紀後半ということになるだろう。

そこで、以下で本関町古墳群の様相を、上記の視点からもう一度見てみることにしよう。

2. 本関町古墳群における古墳群形成過程

群構造の特徴 今回の本関町古墳群の調査では、調査対象となった古墳が初期群集墳の分布域と重なっていたため、大半がI章4(2)及び86頁図1に示した1類に属する結果となった。このことは、一つの群集墳の群構造には、一定の規則性が見いだせることを意味している。その場合、時期別に一定のエリア内にまとまる傾向があることを注意しておく必要があるだろう。

検討が、調査された古墳に限られる制約はあるが、初期群集墳である1類は、柏川左岸の縁辺部に沿って、調査区の南半分に集中する。これに対して、2類は、柏川左岸の縁辺部に3基の中規模前方後円墳が南北に間をあけて占地し、その間の内側に円墳がくる。ただし、この傾向を古墳群の全体に及ぼすことはできない。それでも、前方後円墳を柏川の縁辺部に占地させた意図は読み取ることができるだろう。

古墳群総体で見た場合、円墳の密集傾向は、調査区の南半分に認められるところである。『上毛古墳綜覧』登載の諸古墳の分布の中心が、今回の一連の

調査区の東側に隣接して所在する傾向が認められる。すでに存在していた1類の諸古墳を避けて、2、3類の諸古墳が東側にまとまると理解することができるだろう。終末期段階に属する3類は調査区の中心寄りの東側に集中する傾向が認められる(86頁図1)。

このように、群集墳形成の段階ごとに、分布傾向を異にし、それぞれの類内にまとまりが認められる点は重要である。このような特徴を赤城南麓の他の群集墳でも認めることができるからである。

ところで、畿内の群集墳の群構造を検討した水野正好氏は、滋賀県甲西町狐栗古墳群の分析において、群集墳が、幹道から分岐する複数の枝道に沿って3~4基が占地し、幹道寄りから枝道に沿って順次古墳が築造されていく構造と理解し、この枝道に沿った3~4基を、同一世帯の代々の家長の死が契機となって築造されていった結果と考えた。畿内においては、これに近い群構造が、各群集墳において把握できるとするならば、本関町古墳群の群構造は、明らかに、これとは異なるものであることになる。

堅穴式から横穴式への移行過程 調査の結果、本関町古墳群における初期群集墳の形成時期が6世紀前半を中心とするものであることが明らかになった。これに対しては、最も古くさかのぼる横穴式石室は、今回報告のA区1号墳であり、6世紀前半の所産と考えられるところである。本墳の墳丘は、完全に削平されてしまっており、不明である。石室全長2.4m、埋葬部長1.5m、同最大幅0.6mという石室規模から考えて、群集墳においても優勢な位置を占めるものではない小型円墳であったと考えられる。その階層にまで横穴式石室の採用が及んだことになる。ちなみに、本墳のような簡易で小規模な構造の袖無型横穴式石室が、最初に採用される状況は、赤城山南麓の他の群集墳においても認められるところである。

何分にも、本関町古墳群の場合、2類を構成する中核部分の様相が明らかでない制約はあるが、6世紀第1四半期まで堅穴式主体部による初期群集墳が形成され、その段階での横穴式石室の採用はなかったと考えていいだろう。そして、第2四半期には横穴式石室を採用する古墳も現れる。その場合、堅穴式主体部による古墳が、完全に造られなくなったの

かどうかは、今後も検討課題として残る。

前方後円墳の成立 6世紀第3四半期を中心とした時期に、墳丘長約50mの前方後円墳一ノ関古墳(旧殖蓮村71号墳)が築造される。本関町古墳群の形成過程においては、極めて大きな画期点をなしていたと考えられるところである。当古墳群のその直前までの古墳様相を見る限り、前方後円墳が成立する前提が内在しているとは到底考えられないところである。その場合、前方後円墳の可能性が強い(県道)E・F2号墳、北関A-1号墳の帰属時期が気になるところである。わずかな手掛かりとなる出土埴輪の様相からは、大きくさかのぼらせ得る内容は持ち合わせていないようと思われる。一方で、一ノ関古墳と北関A-1号墳との間には、墳丘規模、周堀の形態的特徴に共通性が見いだせるところである。共通の設計企画に基づいて築造された可能性を示唆するものであり、時期的接近を示唆するものと考えられる。大きくは、これら3基の前方後円墳を6世紀後半の所産と考えたい。

とするならば、3基の前方後円墳の成立基盤については、本関町古墳群の群集墳も当然直接支配下にあったとしても、より広い枠組みの中に位置づけていく必要があるだろう。前方後円墳が本関町古墳群のエリア内に占地したことについては、その以前の段階からの連続性においてではなく、新たにここが、首長墓の墓域として選定された流れが加わったものと考えたい。

その意味では、本報告書が対象とした調査区の東側に近接して所在し、昭和42年に調査された7世紀後半の上原古墳は、これら前方後円墳に系譜的に連なる可能性があるものとして注目されるところである。本墳は直径12mの円墳で、全長5.41m、玄室長3.41m、同奥幅1.93mの比較的大型の横穴式両袖型石室を伴う円墳である。特に注目されるのは、副葬品の内容で、蕨手刀、青銅製鎺帶金具一式、刀子、鉄鏃、棺釘等がある。被葬者が郡司階層に連なるような有力者層であったことをうかがわせるものである。

3. 赤城山南麓における群集墳

ここでは、特に群集墳における主体部の堅穴式から横穴式への移行の様相、及び群構造の特徴について検討することとしたい。

VII 調査の成果

地蔵山古墳群 本関町古墳群とは柏川を挟んで南西側に近接して所在する。独立丘陵の南斜面に形成され、43基が調査された(86頁図3)。5世紀後半に形成を開始し、7世紀後半まで及ぶ。初期群集墳は15基で、すべて円墳。5世紀後半に属するものもあるが、主体は6世紀前半にある。一方、横穴式古墳は26基で、6世紀前半に属するもの4基、後半に属するもの6基、7世紀に属するもの16基からなる。6世紀前半の段階は、竪穴式から横穴式への移行期と考えられるが、一部混在していた期間があった可能性がある。

墓域全体における位置関係は、初期群集墳と6世紀の横穴式古墳は東寄りに混在し、7世紀の横穴式古墳は西寄りにまとまる傾向が認められる。

白藤古墳群 群構成の大半に当たる52基が調査された。うち10基は前期の方形周溝墓。初期群集墳に属するのは35基ですべて円墳。形成は5世紀第3四半期から6世紀第1四半期まで及ぶが、主体は5世紀後半にある。

横穴式古墳は6基ある。その形成時期は7世紀であるから、初期群集墳とのあいだに1世紀近い断絶があることになる。本古墳群の形成上の空白となる6世紀後半の時期は、おそらく横穴式古墳が造られていた時期として間違いない。その墓域が、他地域に求められたことは明らかであり、北東方に所在する月田古墳群が有力候補である。

多田山古墳群 帆立貝式古墳1基を含む20基が調査された。丘陵のほぼ全域を対象としているので、古墳群の全体に近い様相が把握できた。明確に4つの支群にわかれれる。最北端に位置する第1支群は10基から構成され、うち8基が帆立貝式古墳(3号墳)を含む初期群集墳で、すべて6世紀前半に属する(86頁図2)。

その南側に位置する第2支群は3基の円墳からなり、すべて7世紀に属する。2基は截石切組積石室で、このうちの12号墳には唐三彩陶枕が伴う。

第2支群と谷を挟んで南側にある第3支群は4基の円墳からなり、すべて7世紀に属する。このうちの15号墳は大型の截石切組積石室を有する。

第3支群の南に位置する第4支群は3基の円墳からなり、6世紀前半から後半にかけて形成された。

調査区の関係で3基にとどまるが、支群はさらに南にのびることと、これとは別の支群が存在する可能性がある。

このように、一つの古墳群として、一定のまとまりを有していることは明らかであるが、その内部を詳細に見ていくと、構成される支群が、それぞれに築造時期を同一にしたまとまりが明確に認められる点が重要である。

赤城山南麓における群集墳の諸相 ここでは、その他の赤城山南麓の群集墳で、これまで見てきたものとは様相を異にする事例を概観しておく。

蟹沼東古墳群 は、地蔵山古墳群と低地部を挟んで西側にある。62基の大小の円墳が調査された比較的規模の大きい群集墳である。詳しい調査内容が明らかでないため不分明な点も多いが、3基の竪穴式主体部の円墳と内容が不分明な4基を除くと、他はすべて横穴式古墳である。その形成の端緒をなすのは、袖無型石室を有する6世紀前半(第2四半期か?)のものであるが、大勢は6世紀後半から7世紀にかけて形成されたものである。

群構造の詳細は興味が持たれるところであり、今後の課題である。

次に、二之堰古墳群は、蟹沼東古墳群の北西約2kmの前橋市飯土井町の南下がりの比較的なだらかな丘陵に所在している。そのほぼ全体に当たる21基が調査された。調査された古墳は、すべて前庭を有する横穴式石室を主体部とする。また、当地域の6世紀後半の古墳に数多く認められ埴輪を伴うものは1基も存在しない。7世紀、とりわけ中葉から後半にかけて形成されたものと考えられる。3段階の形成過程が認められ、第1段階の古墳4基は、周堀を全周させる。第2段階は、前段階の古墳の間隙に造られるため、周堀部分が重なる部分では、避けるか、掘らないため、全周しないもので、5基ある。第3段階は、さらに墓域が狭くなり、周堀を掘らないで、横穴式石室だけを築造する。石室の構築後、それを覆う程度の盛土は存在したのだろう。4基がこれに属する。さらに、第4段階とも称すべき、明らかに一体埋葬の小規模石室がこの後に造られる。ただし、これらを古墳に含めるべきか否かは、検討の必要がある。

4. おわりに

本関町古墳群の形成過程を起点として、赤城山南麓における群集墳の様相を見てきたが、そこに、いくつかの特徴的なありかたを認めることができた。その点を整理することにより、今後の当該地域の群集墳、ひいては古墳研究の展望・課題につないでいければと考える。

堅穴式から横穴式への温度差の背景 当地域の初期群集墳に一般的な主体部形式である堅穴式石槨とこれに引き続いて採用されるようになる横穴式石室との間には、構築技術の系譜をまったく異にする断絶が介在したと考えられる。特に顕著なのは、6世紀初頭の前二子古墳に代表されるような首長墓に採用された横穴式石室の構造的特徴・構築技術においてである。その採用には、新たな専門技術者の介在を想定せざるを得ないところである。背景に列島規模に連なるような政治的意図が作用していると考えていいだろう。このような技術体系が同時期に及ぼされた範囲は、前方後円墳とこれに準ずる有力古墳に限られていたことがわかる。そのことが、一般成員の家長層に関わる群集墳を構成する中・小型円墳に、依然として堅穴式石槨を中心とした主体部形式が採用され続ける理由と考えていいだろう。

そのような中で、赤城山南麓の地域では、6世紀前半でも比較的早い段階に、群集墳の一部に横穴式石室を採用する流れが認められる。代表的な事例として、伊勢崎市(旧赤堀村)峯岸山古墳群の事例をあげることができるが、これらはちょうど堅穴式石槨の短壁を開けて横穴式石室とした構造であり、在來の技術的基礎の延長上で横穴式石室を実現したことが考えられる。そのため、群集墳の大勢の動きにならなかつたものと思われる。

群集墳の大勢が横穴式古墳を築造するようになるのは、既述のとおり、6世紀後半のこととしていいだろう。おそらく、首長墓における横穴式石室の技術が影響を与え、群集墳の築造体制も整備されるようになった結果と考えていいだろう。

おそらく、このような動向は、ひとり赤城山南麓に限られたことではないと考えられる。早くに横穴式石室が定着する北部九州を除いた列島規模で、もちろん温度差はあります、存在した流れであった

と考えているところである。

群構造の諸相 赤城山南麓の群集墳を具体的に見てみると、群集墳の構造原理に、特徴的な存在形態を指摘できそうな状況が見えてきた。

その最大の特徴は、各時期ごとに、古墳がブロックをなしている可能性である。このことは、今後より厳密に検討を重ねる中で、再度言及していくべき重要課題である。

少なくとも、水野正好氏の群集墳論に触れる中でも述べたが、近畿地方の群集墳の存在形態との間に基本的な構成原理の違いが見いだせる可能性が十分ある。今後に期したい。

*紙数の都合で、註を省略したことを御寛恕いただきたい。

参考文献

- 近藤義郎ほか『佐良山古墳群の研究』1954
- 西嶋定生『古墳と大和政権』『岡山史学』10 1961
- 白石太一郎『畿内の後期大型群集墳に関する一試考』『古代学研究』42·43 1966
- 水野正好ほか『甲賀郡甲西町狐栗古墳群調査概要』滋賀県教育委員会 1968
- 都出比呂志『横穴式石室と群集墳の発生』『古代の日本』5 1970
- 石部正志『群集墳の発生と古墳文化の変質』『東アジア世界における日本古代史講座』4 1979
- 森岡秀人『群集墳の形成』『古代を考える 古墳』1989
- 和田晴吾『群集墳と終末期古墳』『新版古代の日本』5 1992
- 右島和夫『東国古墳時代の研究』1994
- 若狭徹『古墳時代の水利社会研究』2007
- 右島和夫『群集墳の発生と古墳文化の変遷』『東アジア世界における日本古代史講座』4 1979
- 右島和夫『東国古墳時代の研究』1994
- 右島和夫『上野における群集墳の成立』『関西大学考古学研究室開設40周年記念考古学論叢』1993
- 右島和夫『群集墳の築造背景』『福岡大学考古学論叢』2004
- 松村一昭『赤堀村峯岸山古墳群の研究』赤堀村教育委員会 1·2 1975·1976
- 松村一昭『赤堀村地蔵山古墳群の研究』赤堀村教育委員会 1·2 1977·1978
- 松本浩一・桜場一寿・大塚昌彦『空沢遺跡』渋川市教育委員会 1978
- 徳江秀夫他『荒砥二之塙遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
- 小島純一『白藤古墳群』柏川村教育委員会 1989
- 右島和夫『古墳と埴輪・古墳時代の土壙墓』『下淵名塚越遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991
- 三浦京子ほか『世良田諏訪下遺跡』尾島町教育委員会 1998
- 関本寿雄『古海松塚古墳群』大泉町教育委員会 2002
- 深澤敦仁ほか『多田山古墳群』群馬県埋蔵文化財調査事業団 2004
- 前橋市教育委員会『大室古墳群』2005
- 出浦崇ほか『関山遺跡II』伊勢崎市教育委員会 2005
- 出浦崇『一ノ関古墳』伊勢崎市教育委員会 2008
- 『群馬県史』資料編3 1981
- 『伊勢崎市史』通史編1 1987
- 『上毛古墳綜覧』群馬県史蹟名勝天然紀念物調査報告書第五輯 1938

VII 調査の成果



図1 本関町古墳群の時期別・種類別古墳分布図

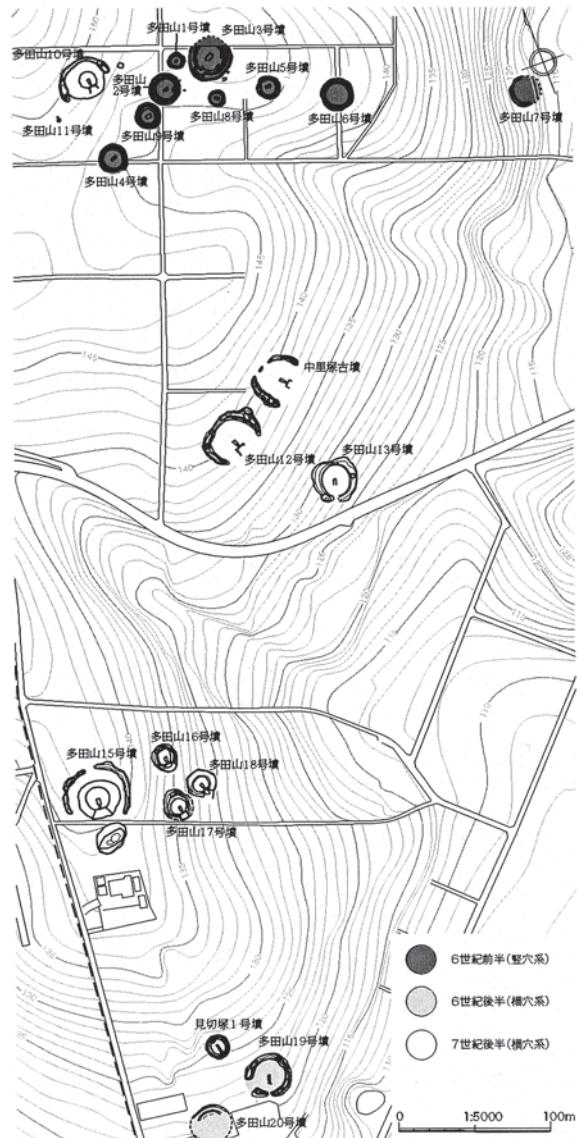


図2 多田山古墳群の時期別・種類別古墳分布図

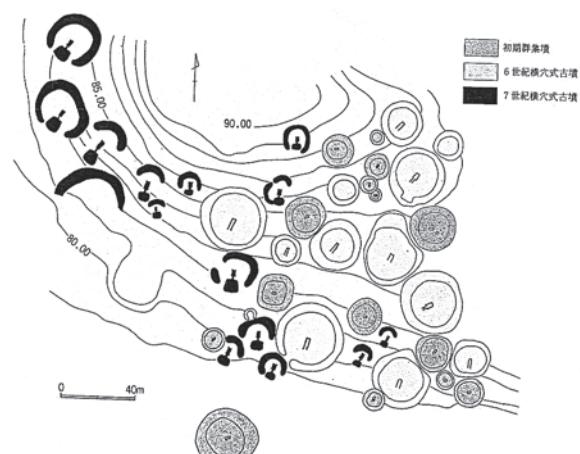


図3 地蔵山古墳群の時期別・種類別古墳分布図